



西向嘉昭先生 : 人と学問 (西向嘉昭博士追悼号)

西島, 章次

(Citation)

国民経済雑誌, 168(5):109-127

(Issue Date)

1993-11

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/00174989>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00174989>



西向嘉昭先生——人と学問

西 島 章 次

I

西向嘉昭先生は、平成4年12月2日、62歳の誕生日を間近にしてその生涯を閉じられた。数年間の闘病生活で先生がわたくしに示されたのは「生」と「学問」に対する不屈の精神であった。病気のため肉体的にも精神的にも極めて困難な状況にあったにも拘らず、いかなるときも学問への情熱を絶やされることはなかった。先生の未完となった論文のタイトルは「1980年代のラテンアメリカのインフレーション」であったが、亡くなられる直前までこのテーマについて最新の文献を丹念に収集され、ご研究を続けられていた。先生の書斎には衰弱した体に鞭打って書かれたのであろうか、勢いを失った字で綴られた分厚い下書きらしきものが残されている。それは、あたかも研究への情熱によって命の灯火を燃やし続けていたかのようなものである。しかし、このような病魔との壮絶な闘いを、先生はごく身近かな人以外には決してお見せになることはなかったのである。

先生が亡くなられてから早くも9カ月が過ぎようとしているが、わたくしがこのような形で先生の「人と学問」を書くこととなり、先生の残された足跡を振り返り改めて行き着いた言葉は「良識」であった。先生が常日頃おっしゃっていた言葉は「大学とは良識の府なり。大学人は良識の人でなければならない」であった。先生は、とくに大学人にみられる傲りや不遜に対して強い拒否反応を示され、常に謙虚であり、心温かい人間であられた。また、大学人はとかく象牙の塔に隠りがちであるため、大学外の社会・地域との交流・接触を大切にされ、常にバランス感覚を持つことに心掛けておられた。先生は、まさに

良識の人でありバランスの人であった。

先生の良識は、先生の学問の根底をなすものでもあった。研究態度は常に謙虚であり、手堅い、ある意味で地味な研究を重視された。議論の飛躍や、単なる思いつきの議論を戒められた。論文に書こうとされたテーマについて、それまでの議論がどこまで進展しているかを正確に把握してからでないと、筆をとらないという頑固さがあった。一つの論文につき、その都度それまでの研究をサーベイし、要約やコメントを記したルーズ・リーフの分厚いバインダーが何冊もできあがるのが常であった。一つのテーマを長期間暖められ、徹底的に考え、再考に再考を重ねはじめて論文に取り掛かれるのである。このため、反面でご自身の研究には絶対的ともいえる自信を持っておられたことも事実であった。適当ないくつかの業績をサーベイするだけで、そそくさと論文を書き始めるわたくしには無言の戒めに思える。

このような先生の学問への態度は、大学院での研究指導にも反映され、極めて厳格であった。しかも決められたテキストを発表者の院生より丹念に読んでこられていた。ときにはテキストにレファレンスとして挙げられている論文などにも目を通しておられた。スペイン語、ポルトガル語などの文献においては、特殊な用語法などもきちっと調べてこられていた。したがって、院生の報告には妥協は許されず、また必ず報告の最後にテキストに対する自分自身のコメント、批判を加えておくことが要求された。しかし、他方で、研究テーマについては、院生時代に理論的な勉強を行っておくことという条件以外は、まったく干渉されることはなく、自由であった。どのような立場の研究であっても、また先生にとって取るに足らないテーマであってもお認めいただいた。決して、院生に自説や研究方向を強制することはなかった。原田金一郎氏とわたくしの二人がお世話になった時代には、マルクス経済学の研究報告とモデル分析が交互に続くという状態が5年間も続いたのである。どのような芽であっても、出ようとする芽を摘み取るのではなく、育てるゼミであった。いかなる学派や学説であってもそれを尊重され、また院生を一人の研究者として認めたゼミであ

った。

西向嘉昭先生の「人と学問」を書くことは、わたくしには過ぎたる仕事である。わたくしにとって余りにも偉大な先生の人となりと学問を正しく理解し、それを表現する能力に不足しているからである。しかし、敢えて筆を執らせていただくのは、先生の人と学問の基底をなす「良識」を改めて理解し、受け継ぎたいと思うからに他ならない。

II

西向先生は、昭和5年12月14日に西向繁三、コツタ夫婦の長男として神戸市兵庫区有野町で出生された。父繁三氏は神戸有馬電気鉄道に勤められており、堅実な家庭で精神的にも落ちついた環境のなかで幼年期を過ごされていた。しかし、どのような経緯があったのかは定かではないが、父繁三氏は昭和14年頃に神戸電鉄を突如として退職されている。このため、当時戦時色が強まっていた状況下で、しかも古い体質を色濃く残している裏六甲の農村にあっては、勤め人が無職で過ごすことはできず、追われるように朝鮮に一家を挙げて渡り、鉄道関係の仕事に携わることになった。しかし、朝鮮での生活は、慣れない土地でもあり、必ずしも安定した状態ではなかった。先生は小学4年生のときに朝鮮に渡られたが、それまでの日本での生活とあらゆる意味で異なり、多感な少年期にあった先生にとって異国での生活はとても辛いものであったそうである。

このため、5年生のときに1年余りの滞在を経て、ご両親のもとを離れ独り帰国されている。子どもを親もとから離して帰国させるにはそれなりの事情があったと推察されるが、先生の強い希望もあり、ともかくも帰国すると神戸市谷上の母方の祖父母宅に引き取られて生活することとなった。両親とは別れての生活であるが、幸いにも祖父母の暖かい愛情につつまれ、再び神戸の地で恵まれた少年期、青年期を過ごされることになるのである。祖父母の家庭が比較的裕福であったことと、独り帰国した孫に対する祖父母の気持ちを考えると、

それはむしろ甘やかされたといえるほどの生活であったであろう。

ところで、このような生活上の激変は少年期の精神形成に少なからぬ影響を与えたはずである。しかし、帰国について確かにいえることは、先生の勉学にとっては幸いであったことである。1年生から3年生までを過ごした有馬尋常高等小学校では10段階評価で10がほとんどであったが、4年生を過ごした順天東公立国民学校では甲乙丙丁評価の甲にかなり乙がまざっている。生活環境の変化にかなり影響されたのであろう。しかも、外地での学力水準を考えると、終戦まで朝鮮に滞在していたとすれば、学力の低下は免れなかったはずである。しかし、帰国して通学することとなった谷上国民学校では、とくに6年生になると優良可評価でほぼ全優となるまで挽回している。昭和18年には兵庫県立第二神戸中学に入学し、大学予科をめざして勉学に励むことになる。

しかし、敗戦色は日毎に濃くなり、中学3年のときに終戦を迎える。混乱した時期であり、ましてや祖父母のもとにあり「とにかく溺愛された」という環境で、必ずしも勉学一筋ではなかった。例えば、両親、兄弟のいない寂しさをまぎらわすかのように、陸上競技部の200米走・1500米走の選手として練習、練習の毎日に明け暮れることになる。また、野球部のピッチャー・四番打者として活躍したり、古くからの慣習やしきたりが残る裏六甲で、地域とのつながり、とくに青年団での活動や交友関係にのめり込んでいった。先生はしばしば「悪友たちと不良をしていたよ」と懐述されている。終戦の翌年にご両親が帰国され再び家族と同居することとなったが、戦後の混乱期を外地で過ごし疲れきった両親の現実の姿をみて想像していたのと大きなギャップを感じ、ご両親との新しい生活はなかなか馴染めないものであった。神戸電鉄で神戸二中まで通っていたが、いつも途中にある谷上の祖父母の家に寄り道し、「やっぱりばあさんのほうがいい」とこぼす毎日であったという。

以上のさまざまな事情により勉学は思うようには進まず、第1志望の医科系の受験をあきらめ、昭和22年に大阪理工科大学を受験する。初めての挫折とも呼べるものであった。当時の心境を先生は日記に「真理探求こそ学徒の使命。

いかなる大学であろうとも堅固なる身体、緊張した精神、まして伝統ある（神戸二中の）武陽魂の躍るところ疑惑の陰なし。願書依頼する」と記されている。ともあれ、早くから大学進学を決意しておられ、なんとしてでも大学進学を果したいという意志のなか、挫折感をかえって充実した予科生活を過ごさせることとなった。しかし、ご両親との溝を埋めることはできず、どうにか自活しながら大学に通える方法を考えなければならなかった。このため、予科卒業後すぐに神戸市立山田中学で英語と数学の教諭となると同時に、もともと理系志願であったが仕事をしながら通える神戸経済大学第二学部へ入学する。昭和25年のことであった。

中学教師と大学生を兼ねた5年間は、だれの世話にもならず独立した自由な生活を謳歌した時期であった。中学教師との両立は必ずしも生易しいことではなかったが、少ないながらも一応生活の糧は保証され、灘区八幡通りに下宿をかまえ、当時の熱気溢れる第二学部の学生達と神戸経済大学のアカデミックな雰囲気に関ることができたのである。精神的に安定してくると、本来の研究意欲がもたげてくる。藤井茂博士に強い影響を受け、卒業論文は『ハロッドにおける国際的均衡調節機構の考察』を提出し、大学院進学を決意する。

III

一人の学者がどのように生涯の研究テーマを決めるかについては、さまざまなケースがあるであろう。当時ラテンアメリカと何のゆかりもなかった西向先生がラテンアメリカ研究に取り組むことになったのは、どのような経緯があったのであろうか。大学院では藤井茂博士の指導のもと、当時の「後進国経済開発論」の研究を行っていたが、藤井博士の英国留学を契機に経済経営研究所の柴田銀次郎博士の指導を受けるようになっていた。修士論文は『後進国経済発展と国際貿易』であり、結果的に藤井博士と柴田博士のお二人の指導を受ける好運に恵まれたといえる。

博士課程に進学した昭和31年の初秋の頃、突然柴田博士の研究室に呼出があ

った。「ラテンアメリカ経済を専門的に研究してみる意志はないか、もっともその意志があるとしても、それにはまずスペイン語とポルトガル語の習得が必要であるが、君の語学能力ならやれると思うが」という趣旨のお話であった。柴田博士が西向先生にラテンアメリカ研究を勧められたのには次の背景があった。周知のように神戸大学では、その前身である旧神戸高商以来、南米地域の研究と実践の伝統があり、これを基盤として昭和31年4月に経済経営研究所にわが国最初の中南米経済部門が設置されたことである。柴田博士は、この新設部門で専門スタッフとなり得る人材をかねてから探しておられ、博士の指導を受けられるようになった西向先生に白羽の矢を立て、できれば自ら養成したいと考えられていたのである。まさに運命的な巡り合わせであったといえる。

しかし、柴田博士からの突然のお勧めに、西向先生の心中は大変複雑であったそうである。当時、特定の発展途上地域を研究対象として持ち、その地域に根をおろした経済開発理論の研究に取り組むことは、架空の代表的発展途上国を対象とする机上の経済開発理論から脱却し、理論と実証の相互反復が可能な科学的な経済開発論のためにも、その必要性を強く認識されていた。しかし、そのためには現地語学の習得が一つの前提条件となるが、まったく未知の新しい言語であるスペイン語やポルトガル語を果たしてどこまで習得できるか、すでに26才になっていた先生にとってはまったく自信が持てなかったのである。ともかくもその場での即答は避け、しばらくの猶予をいただくことになった。厳しい選択を迫られ、西向先生はある決心をされる。とにかくポルトガル語の勉強を始め、自信をもてれば受諾のお返事を申し上げようというものである。

それからは苦しい数カ月間であった。スペイン語よりポルトガル語を選ばれたのは、とくに深い理由があったわけではなかった。スペイン語に関しては当時すでに入門書や辞書が何点かあったのに対し、ポルトガルについては入門書は唯一『ポルトガル語四週間』だけであり、どうせやるなら目移りしないものという単なる「あまのじゃく」な気持から発したものであったそうである。しかし、26才から新しい言語を学ぶことはそれだけでハンディがあり、尋常の覚

悟では不可能であるという意識を強くもたれていた。そこで、好きな酒を絶つこと、他の外国語に接しない、というかなり律儀な決意をされ、実行されたのである。いうまでもなく、その成果の有無はどうでもよく、自分に対する戒めの意味であったが、それだけに悲壮であったといえる。

『ポルトガル語四週間』はほんの入門書であり、しかもステップ学習でうまく構成された参考書であったが、ラテン語族のポルトガル語は動詞の活用が複雑で直接法・間接法の区別、不規則動詞の多さなど、必ずしもとっつき易いものではない。一日一日のスケジュールを大切に、はやる気持ちを抑え、とにかく反復に反復を重ねてポルトガル語の違和感をなくすことに集中した。4週間で一応テキストは終了するが、さらに最初から繰り返して復習し、結局4週間で3回反復学習するという慎重さであった。この時点で練習問題にあたり、ようやく自信のもてたところで柴田博士の研究室を訪ね、ご返事を差し上げたとのことである。お話があってから実に3カ月後のことであった。

IV

ポルトガル語という新しい語学の習得とブラジル経済の研究を始めた大学院時代、新たに直面した難問は外国経済研究の方法論であった。当時は地域経済研究・外国経済研究、とくにラテンアメリカ経済へのアプローチの方法は、ほとんど未知に等しい状態であった。博士課程の2年目となれば、学友達はそれぞれ専門とする分野で次々と研究成果を論文として発表していく。一人取り残されたような気持ちに囚われ、「自分は外国語の習得のかたわら、ブラジル経済という未知の巨象の一部を独りで撫でているだけだという焦燥感にとりつかれた」そうである。研究の進展自体は「牛歩」でもよいから、確信のもてる方法論に渴望する日々であったといえる。

しかし、当時神戸大学におられた三人の恩師の門をたたき、光明を得られる。それぞれの恩師はそれぞれ三人三様の問題意識と方法論をもっておられたが、以後の西向先生の研究方法の中でみごとに一体化され、先生の地域経済・ラテ

ンアメリカ経済研究の根底をなし、脈々と息づくことになる。

大学院ゼミナールの恩師である藤井茂博士は、理論的分析ツールの重要性を諭された。ラテンアメリカ経済を研究対象とするとしても、その努力を単にラテンアメリカの経済事情の把握のみに傾注するのではなく、それを解明する道具の影塚に心掛けなくてはならない。優れた道具を持つほど、仕事の幅は広く、しかもいい仕事が可能である。ところが外国経済研究においては、経済学の広範な各専門分野の分析ツールの習得が要求される。しかし、それは現実には至難の業であるため、一步でもその方向に近づくために努力を怠るなかれ、という教えであったと理解されたのである。幸い、当時の藤井ゼミナールのそうそうたるメンバーのなかで、とくに国際経済学の研究には恵まれた環境があり、以後、先生のご研究の理論的基礎を国際経済学に求められるのである。

先生は藤井博士の英国留学に伴い、経済経営研究所の柴田銀次郎博士の指導も受けられるようになっていたが、柴田先生の示唆は、一国の経済発展を支える根底となる農業の研究から着手せよというものであった。当時すでに多くの発展途上国で工業化が開始され、また工業化理論が脚光を浴び始めた頃であった。ブラジルでも「メタス計画」と呼ばれる最初の工業化計画が華々しく実施されている最中であったため、ブラジルを研究対象とする若き学徒とすれば、いきおい関心はその方向に向けられても不思議ではなかった。しかし、柴田博士の助言は、ともすれば工業化のみに目を奪われがちな当時の傾向に対し、経済発展の根底をなす農業部門の地道な研究の重要性を説かれたのであった。とくにラテンアメリカには固有の土地所有制度などの問題があり、これがラテンアメリカの経済発展を規定していることから、ラテンアメリカ研究には避けて通れないものであった。当時、開発経済学を志す研究者のほとんどが工業化の問題から始めたのとは、極めて対照的であった。

いま一人、中国经济論を専攻されていた宮下忠雄博士の教えからも大きな影響を受けておられる。宮下博士とは特別の師弟関係はなかったが、日頃からその学問的警咳に触れられていたのであろうか、敢えて博士の教えを請われたの

であった。宮下博士は、新しい経済事情に目を奪われるのではなく、歴史的な研究に重点を置くように論されている。いかに優れた現状分析を試みても、時間の経過とともにその研究は次第に色彩を失い、とくに発展途上国においては変化のスピードは速く現状分析はたちどころに陳腐化し、後生の研究者のさらに優れた分析の中に埋没する結果となる。また、なによりも歴史的な分析は、その時々的事象に惑わされることなく、ラテンアメリカ経済に横たわる本質に迫る極めて有効な方法の一つとなりうるからである。しかし、歴史的なアプローチは丹念な資料の収集と事実の整理から始まり、長期間にわたる地味な研究が要求されることから、経済発展に対する華々しい政策論に直結する研究とはほど遠い。このため、多くの研究者が政策論指向の強い地域経済論や開発経済論をめざしたのであるが、この点においても先生は強く自らを戒め、博士の訓戒を守られたのである。

三人の恩師の教えを得て、当初はいささかの戸惑いのなかにも、研究方法にいくつかの光明を見い出され、ようやくにして博士課程在学中に処女論文が完成するのである。「ブラジルの小作制度の展望と特質」は、大土地所有制度がいかに農業の近代化を妨げているのかを、小作制度の特質に照らして解明しようとする試みであり、「ブラジル農業史研究序説」はブラジル農業の発展、とりわけ輸出一次産品の変遷を歴史的観点のみならず、国際分業論の理論的視点からも接近しようとしたものであった。しかし、これらの論文は三つの教えを忠実に守るものであったが、必ずしも一体化したものではなかった。先生はこれに飽き足らず、以後は三つの教えを総合化することに心血を注がれ、後に先生の学問の体系として結実することになるのである。

ようやく地域経済研究の方法論にも確信が得られ、ブラジル経済の研究をさらに推し進めようとしていたところ、藤井博士とともに夜の街に出る機会があり、博士お馴染みのバーへ誘われたそうである。そこで、藤井先生は「もうこの辺りで飲んでもよかろう」と律儀に酒断ちを続ける西向先生にビールを勧められたのであるが、恩師に注がれた数年ぶりのビールの味は、これまた格別の

思い出となったとのことである。

V

昭和34年5月、西向先生は神戸大学経済経営研究所中南米経済部門の助手として迎えられる。この時期は、ラテンアメリカ経済研究の黎明期であり、研究所にとっても、わが国にとっても本格的なラテンアメリカ経済研究がこの新設講座をベースとする学術的な研究によって開始されるのである。

周知のように、神戸大学では従来から南米研究の輝かしい伝統を持っていた。神戸高等商業学校の創設以来、海外発展に関心が深く、南米とくにブラジルには凌霜の多くの先輩諸氏が海外飛躍をめざして渡航し数々の活躍をされてきた。また、大正8年に経済経営研究所の前身である商業研究所が附設され南米同志会とともに南米事情の調査研究が開始され、次いで昭和4年の大学昇格とともに初代学長である田崎慎治先生によって「植民政策」が開設され、神戸大学の地域研究の体制が確立されることとなった。さらに、昭和8年には、新築の研究所内に中南米経済調査室が設置され、金田近二教授を主幹として調査研究が本格化し、また昭和12年には「南米文庫」が設立され、わが国における中南米研究の輝かしい伝統となるのである。

しかし、以上のように戦前から神戸大学はラテンアメリカ研究の伝統とすぐれた研究環境を持っていたが、それまでの研究は基本的に拓殖・植民政策の研究が主流であったことは否めない。これらの輝かしい伝統を背景としながらも、経済学にその基礎をおく本格的な研究が始まったのは、研究所に「中南米経済部門」が開設された昭和31年からであったとあって決して過言ではない。このような時期に西向先生は多くの期待を担って助手として研究所に奉職されたのである。

西向先生は、一年後の昭和35年8月から翌年37年2月まで、ブラジルに留学されている。戦後の研究所の海外渡航記録をみると、1番目が柴田教授の沖縄で、2番目が西向先生となっている。当時の海外渡航が現在ほど自由でない時

代に、多くの先生方より早い時期に西向先生が海外に出かけられていることは、いかに研究所全体が先生に大きな期待をかけていたかを物語っている。ブラジルでは、先生の留学に先立ち研究所に赴任していた斉藤広志教授が勤めるサンパウロ大学政治社会学院に籍を置き、研究者としての資質を大きく飛躍させる貴重な体験を積まれるのである。まさに、ブラジルへの本格的な留学として戦後の嚆矢となるものであった。

サンパウロには多くの凌霜の先輩がおられ、先生はブラジル生活を満喫されたようである。しかし当時の先生を知る凌霜の先輩方が異口同音に語られるのは、研究とブラジル生活をエンジョイされることを見事に両立されたことである。ともすれば、海外留学は悲壮感を伴い滞在先の大学に隠りがちとなることが多いが、こと地域経済研究に関しては必ずしもこれは有効な方法ではない。大学内だけではなく、広く留学先の社会との交わりがなければ一国経済に対する経済感のようなものを養えないからである。このためには、ポルトガル語の能力はもちろんのこと、ブラジル自身を無条件で好きになることが必要であるが、この点について凌霜の先輩方の助力には謝して尚余りあるものがあつたと述べられている。

ブラジルでは、単にサンパウロでの生活だけではなく、北はアマゾンから南はアルゼンチンとの国境まで、ブラジル各地をつぶさに見聞されているが、この体験は戦後のブラジル経済の急速な経済発展がいかに多くの矛盾を抱えているかを認識させるのに十分であった。とくに東北部が植民地支配の名残をとどめながら、なおかつブラジルの工業化に取り残され、いっそう格差を拡大している様は、先生の脳裏に深く刻まれたそうである。これはブラジル経済について実感として認識された一例であるが、以後の現実と理論とが体系化する先生の研究の出発点となるのである。先生は後に、地域研究者がなすべき重要な課題として「各地域のそして各国の政治的、経済的、社会的現実の正しい理解に到達するための努力が必要である。そして新しい現実はその解明に新しい理論を必要とし、理論はまた現実の正しい認識に立脚せねばならない。ここに地域

研究の課題がある」(アジア経済, 1969年6—7月号)と述べられている。

先生はブラジルから帰国してすぐ、新進気鋭の学徒としてまさに活躍を始められたところで、香代夫人とご結婚される。山田中学での教師時代に懇意にされていた当時の六甲山森林植物園長であった河原巖氏とのご縁によるものだと聞いている。先生は、以後、家庭とお子たちのことはすっかり奥様にまかせ、研究に専念されることとなるが、温かいご家庭を守ってこられた奥様の陰の支えが、先生のご研究を可能としたといっても決して過言ではない。夫人との間に、先生は二男、一女をもうけられ、ご長男は神戸大学経済学部を卒業され現在セキスイ化学に勤務され二人のお子様をおもちである。ご次男は広島大学文学研究科国史学専攻に在籍中で、学者としての道を歩まれている。すでに幕末期における播磨地方の醤油、木綿、塩業についていくつかの優れた論文を発表されている。ご長女は大阪大学文学部を卒業されご結婚後もサントリーでご活躍中である。

VI

以下、三つの代表的著作によって先生のご研究を辿ってみよう。これによって先生の学問的体系の全てをとうてい物語れるものではないが、それぞれ先生のご研究のエポックと対応しているからである。

(1) 『ブラジルの経済発展の一般的特質』(中南米経済叢書V, 1963年)。

本書は西向先生のブラジル留学の成果であり、大学院時代から引き続くブラジル経済の歴史的な分析である。しかし、この研究は先生の以後の研究の基礎となっており、そこにみられる問題意識や取り扱われた問題は、後に先生が追求されていくテーマの大部分と対応している。すなわち、経済発展の国際貿易論からのアプローチ、工業化戦略、インフレーション、外国資本、地域格差などの幅広いテーマが取り扱われている。

本書の目的は、ブラジル経済の特質を、コーヒー輸出依存経済とこれから脱

却するための工業化過程として歴史的に段階を追って克明に分析し、問題点を抽出することにある。まず、前半ではコーヒー輸出依存の植民地的経済の発展要因が主として外在的な要因によって規定されていることを多くの資料にあたり綿密に分析されている。そこでは当時のブラジルの経済学界で第1人者であったセルソ・フルタードの所説に大きく影響されていることが窺えるが、国際貿易論の立場から問題を捉え直し、交易条件の不利化や貿易関係の変化が、輸出収入・輸入能力を通じて国内経済に与える影響をみごとに描き出している。

多くの論点の中でもとくに注目すべきは、今世紀初頭のブラジルの工業化の開始に関し、統合的な開発政策の帰結ではなく、むしろ不況に陥った輸出農業部門を保護するために採られた諸手段が、派生的に工業化に有利な条件を生じせしめたという、ユニークな主張をおこなっている点である。すなわち、コーヒーの過剰生産に基づく価格の下落によって輸出部門の所得が低下し輸入能力が停滞したことに対し、コーヒー生産者への価格保証のために為替レートのあいつぐ切下げが実施されたが、これが輸入品価格を高め輸入競争財産業の生産を有利化し、結果として輸入代替部門への資源の移転を促したというものである。本書では綿布産業についての詳細な実証研究がなされているが、これは一次産品輸出経済の初期の工業化が、一次産品輸出部門が不況のときに開始されるのか、好況のときに開始されるのかという論争にブラジルのケースで一つの解答を与えるものである。

さらに1930年代から戦後にかけての工業化過程についても多様な議論が展開されている。その中でも着目すべき議論は、労働の移動という観点からの分析であり、農業部門から工業部門へ、後進地域から先進地域へ、農村部から都市部への労働移動を克明に追い、これらに共通する現象として労働が流失した部門より流入した部門の実質賃金の上昇率が高く、これが地域間格差や所得分配の悪化をもたらしたことを明らかにしている点である。このような工業化過程はいずれ必然的に社会的緊迫をもたらすと同時に、農工間のアンバランスな発展によって順調な発展プロセスを阻害するとしている。これに対しては、農業

部門の近代化が必須であると示唆しているが、このような課題は現代のブラジル経済においても依然としてもっとも重要な問題の一つに他ならない。

本書では以上の論点の他、工業化過程とインフレーションの係わり、工業化と外国資本の関係など、多くの重要なテーマが議論されており、大原美範氏の書評で「本書はブラジル経済についてわが国で初めて理論的分析を試みたものとして注目される」（南米研究第10号、1963年）とあるように、戦後わが国で初めてなされたラテンアメリカ経済の本格的な研究であるといえる。本書は先生の並々ならぬ情熱を彷彿とさせているが、この研究は以後の先生の本格的なブラジル経済もしくは地域経済研究に発展していくものであり、地域経済研究者にとって若き日の現地体験がいかに重要であるかの証左でもある。

(2) 『ブラジルの工業化とインフレーション』（アジア経済研究所、1964年）

本書はラテンアメリカのインフレーションを扱ったわが国で初めての書物である。ラテンアメリカの経済発展に関する重要なテーマの一つは、経済発展とインフレーションの関係である。ラテンアメリカとくにブラジルにおいては、インフレーションは経済発展を促進するのに役立つのか、逆にインフレ抑制が持続的な経済発展の基本的必要条件なのか、あるいはインフレーションは経済発展に不可避免的に随伴するものなのかなど、さまざまな議論がなされていた。しかし、その多くは理論的な分野での議論であり、ラテンアメリカ諸国の経験に基づく実証的な検証が要請されていた。すでに前著においてブラジルの工業化過程とインフレーションについて議論がなされているが、必ずしも十分なものではなかったため、改めて克明な議論を展開したものである。戦後のブラジル経済における急速な発展とインフレーションの共存は、はたしてインフレーションが経済発展を促進するという因果関係に基づくものなのであろうか。とくに、インフレーションが資本形成を高めることができるのか、さらにそれをめぐるブラジル固有の諸条件を分析することが重要となる。

本書では、まず「構造派」と「正統派もしくはマネタリスト」の論争が整理

され、ついでとくに構造派について詳細に検討し、以下の批判的評価を行っている。(1)「構造派」がインフレーションの構造的要因の重要性を指摘したことは確かに正しいが、構造的諸要因相互の関係、ならびにそれがどの程度インフレーションによって誘発されたものであるかをさらに具体的に研究する必要があること、(2)「構造派」は機械的な定命論に陥ることは避けているが、その反面で経済安定化と経済発展に関して具体的に可能な政策を提言するにはいたらず、単にインフレーションの構造的諸要因に集約される後進性除去の必要性を強調するにとどまっているなどであるが、これらの批判は今日のいわゆる「新構造派」に対しても十分に妥当する批判であることに注意しなければならない。

さらに後半では、以上の理論的な検討を踏まえ、「構造派」の議論を背景としてブラジルで論争されていたいわゆる「安定的発展モデル」に対し綿密な検証を行っている。すなわち、インフレーションと経済発展に関する諸命題である、(1)インフレーションが貯蓄性向の高い高所得者層へ再分配効果をもち、投資資源を増加させる、(2)インフレーションは実質利潤を高め民間投資を促進する、などについて、ブラジルでこれらの命題が成立する条件を満たしているかどうかの実証的な吟味である。

まず、インフレ主義者の提起する命題は、それが成立するための適切な制度や習慣および行動原理が満たされていないことが重視される。ブラジルの経験では、富裕階級の消費習慣や投資決定はいまだに伝統的な形態に著しく支配されており、分配と貯蓄、分配と投資には明らかな関係はない。また、資本市場の構造が、インフレーションによって生じた強制貯蓄を工業に向かわしめる効果的な機能を持つにいたっていないことも重要である。さらに、実質利潤はインフレーションよりもむしろ資本財の輸入価格によって決定されていることも明らかにされている。したがって、慢性的インフレーションそれ自体は必然的に資本形成の増大を刺激するものではない、と結論づけている。

さらに、インフレーションがむしろ経済発展を阻害する側面にも言及がなされている。インフレーションによる不動産投資や資本逃避の増加による実物投

資の減少、インフレーションがもたらす所得再分配による低所得者層の消費財需要の低下などである。また、インフレーションが資本市場の発展を妨げることや、インフレーションがもたらす一貫性を欠く経済政策やあいつぐ金融当局の政策変更も重要である。結局「経済発展に必要な文化的、制度的変容がインフレーションによって達成されるとは、いかなるインフレ主義者といえども認めることはできないであろう。ブラジルにおいてはまさにインフレーションがそれらの必要な変化を妨げているといわねばならない」とECLAやブラジルで擁護されていたインフレーションが経済発展を促進するとする立場に対し、厳しい批判をなげかけている。これらの認識は現在ではかなり一般的となっているものの、当時のブラジルでの学会を二分していた状況を考えると、先生の分析の確かさを改めて認識させるものである。

(3) 『ラテン・アメリカ経済統合論』（有斐閣、昭和56年）

先生の数多いご業績のなかでも、もっとも評価の高い研究である。私のような浅学が解説するまえに、アジア経済研究所より昭和57年に受賞した「発展途上国研究奨励賞」の審査委員であった中村隆英博士の講評の一部を再録しておこう。「本書は著者の20余年にわたる、この主題についての研鑽の成果を、密度濃くとりまとめた力作である。日本において、極めて研究者の少ないこの分野で、本格的な業績が出現したといえよう。（中略）経済統合の実態と、その成果や戦略という実戦的な課題を、国際経済の理論にもとづいて、みごとな理論の一貫性を保ちつつ、体系的に分析した点に、本書の特色がある」（アジア経済23巻第7号）。ここでわたくしが着目したいのは、まさに先生が長年めざしてこられた現実と理論を踏まえた地域経済論が図らずも中村博士によって評価されている点である。また、この本について「宮下忠雄先生から最大のお誉めの言葉をいただいた」と先生が漏らされたのを記憶しているが、宮下先生を訪ねた頃の若き日を思いだし、西向先生の感慨もひとしおであったろうと思われる。

本書の主要な貢献は以下のようにまとめられる。

第1に、伝統的な経済統合理論から出発し、発展途上国の経済統合理論を体系的に構築し、これに基づきラテンアメリカにおける経済統合への政策的インプリケーションを明確にしたことである。とくに、発展途上国の経済統合が資源の効率的分配よりは、むしろ経済発展にとって不可欠である工業化の推進を目的とするという明確な位置づけを与えていることは重要である。

第2に、ラテンアメリカ地域での経済統合が有する固有の課題を析出し、これを中心にこれまでの経済統合理論や現実の経済統合の試みを批判的に検討していることである。ラテンアメリカ地域の経済統合のように、加盟国の発展段階が大きく相違する場合、経済統合を成功させる条件が、単に統合体の能率性にあるだけではなく、統合利益の加盟国間での衡平配分にも強く依存することを明らかにしている。

第3は、このような統合体の能率性と衡平配分の観点から、ラテンアメリカ地域の経済統合理論を整理し、現実の経済統合の試みがこの問題に如何に対処してきたかを詳細に検討していることである。かかる観点からの統合原理もしくは域内分業原理の問題の分析と整理は、他の発展途上国地域における経済統合の試みに対し、有益な示唆を与えるものである。

第4は、以上の能率性と衡平性に基づく統合原理に立脚し、独自の「商品別域内分業原理」を提唱しているが、これは経済統合の能率原則と衡平原則を同時に充足する方策として、高く評価されるべき構想である。かかる観点から、この構想を一層展開し現実化したものとして、「アンデス部門別工業開発計画」を積極的に評価し、その一層の改善方法として加盟国間での生産割当品目の事後的な交換ないしは譲渡を示唆しているが、この点も本論文の一つの新しい貢献であるといつてよい。

ところで、この本を出版された頃までが学会において経済統合論がもっとも盛んに議論された時期であったが、以後地域経済統合論は下火となっていく。しかし、先生が晩年に病に伏され、思うように研究できなくなった1990年代に

再び地域経済論が脚光をあびるようになったが、これは運命の悪戯であろうか。先生が亡くなられた後、先生の研究室の整理に立ち会わせていただいたが、机のうえに経済統合に関する新しい文献や資料が積み上げられていた。今もなお、生前に注文されていた洋書が次々と到着しているのである。さぞご無念であられたであろう。いずれにせよ、近年のNAFTA（北米自由貿易協定）など途上国に関わる地域協力、経済統合の動きに対し、改めて先生のご研究に基づき、地域経済統合論を再評価することはわれわれの責務である。

なお最後に、先生の業績として忘れてならないものとして移民研究を付け加えておかなければならない。例えば、昭和45年に兵庫県の委託調査で執筆された『兵庫県海外発展史』は、綿密なフィールド・ワークに基づいた大作であり、移民史研究における極めて貴重な業績であるが、「私の隠れた大作です」とおっしゃっていたものの、委託研究であるが故に先生は決して学術的な業績としてカウントされることはなかったのである。

VII

結局、先生のご研究は、ラテンアメリカ経済論が経済学のなかで市民権を得るための闘いであったといえる。先生がラテンアメリカ経済の研究を始められたころは、学会においても、また実学の府からアカデミズムの府へと脱皮を図ろうとする神戸大学においても、ラテンアメリカ経済論の地位は極めて低いものであった。そのなかで、理論と現実の総合というバランスのとれた地域経済研究の方法論を確立し、試行錯誤を重ねながらも極めてオリジナリティー溢れる研究を残されたことは、決して過小評価されてはならない。先生は、『ラテン・アメリカ経済統合論』によって昭和57年に神戸大学経済学部より博士号の学位を取得されたが、これはわが国のラテンアメリカ経済研究の分野において初めて授与された学位であった。原資料の幅広い渉猟と長期間にわたる現地体験に基づき十分に現実を踏まえる一方で、国際経済学や開発経済学のみならずラテンアメリカ独自の経済理論の深い造詣をもって、理論と実証のフィード・

バックをラテンアメリカという地域経済研究の領域で実践され、ラテンアメリカ経済論の今日を築きあげられたのである。

しかし、わが国におけるラテンアメリカ経済研究のパイオニアとしての苦勞も絶えなかった。わが国のラテンアメリカ経済研究の初期には、現地においてもラテンアメリカに関する資料が不足し、ましてや日本においてはその入手ははなはだ困難であった。あるときは、東京大学まで出向き、借りてきたポルトガル語の書物を抱えて帰り、全てをタイプで写しとることもあったそうである。「中南米文庫」の拡充が進められたのもひとえに先生のご努力の賜物であった。さらに、ラテンアメリカ研究の水準を高めるためには、客観的な評価が必要で研究者間での相互批判が不可欠であったが、このために「ラテン・アメリカ政経学会」の設立と運営に積極的に関与され、多くの研究者との間で激しい論争を繰り返されている。とくに日本を代表するラテンアメリカ経済の研究者であった大原美範氏との論争には極めて厳しいものがあったが、先生の日本のラテンアメリカ研究の学問的水準を高めるための意気込みには並々ならぬものがあったのである。また、神戸大学「南米研究会」での先生の熱心なご指導はとりわけ有名であった。

先生は、名実ともにわが国におけるラテンアメリカ経済研究のパイオニアであられたが、まさにパイオニアであったがために「書いたものが正しい事実・命題として一人歩きする。故に厳密な研究でなければならない」を自らの厳しい戒めとされ、決して尊大となることなく、むしろ堅実な研究、手堅い研究を信条とされたのである。そこには、見せかけの研究ではなく、誰にどのように評価されようと、真の学問を探求する厳しい姿勢があった。先生はしばしば「学問が人を造る」とおっしゃっていたが、まさに先生の学問が先生の良識を成したと思えてならないのである。

最後に、先生のご冥福を謹んでお祈り申し上げ、先生がまさに生涯を賭して高められた経済経営研究所のラテンアメリカ経済研究を、今後いっそう発展させることをお誓いして、拙い筆を置かせていただく。

